

絵本の読みきかせは、子どもの発達にいいことが明らかに

おはなし会を 開こう!

運動フェア実施!

この特集で紹介した絵本のコーナーが以下の書店に設けられます。詳しくは下記まで

にこにこ書店
(東京都新宿区)
03-3565-6232

本誌創刊号でまっ先に組んだのは、「やってみよう! 読みきかせ」という大特集でした。

子どもたちに本を読んで、本を手渡す。

その場としての読みきかせ=おはなし会。

それこそが、この雑誌を世に送り出す根幹でした。

その後もこの特集は、新しい情報を加えて定期的に継続し

多くの方が活用していただきました。

100号で休刊するにあたり、

読者のみなさんには、これからもおはなし会を続けていってほしい、

子どもたちに種をまき続けてほしいという思いでお届けします。

今回の特集では、子どもたちに絵本を読んであげることによってどんな効果があるのかという最新の研究結果を、

東北大学大学院医学系研究科教授、大田千晴さんに伺いました。

おはなし会への一歩を踏みだして
子どもに本を手渡す人!

これまで、多くの読者にお話を伺い、おはなし会を始めたきっかけで最も多かったのは、「自分の子どもが小学校に入ったこと」でした。朝の読書時間に絵本を読んでいる学校は少なくありません。その時間に、ボランティアとして参加したのが最初という人も。次が、子どもとよく行く図書館で定期的におはなし会があるのを知って参加したというものでした。

新年度が始まって2ヵ月余。学校の様子もわかってきたところで、もし、朝の読書で絵本を読みきかせしているようなら参加してみませんか。毎日ではなく、1〜2ヵ月に1回順番が回ってくることも多いようです。図書館でのおはなし会は、図書館の職員に現状を聞いて、自分が参加できるグループがあるか調べてみてください。

また、自分で新たにおはなし会の開催に挑戦する方に、何から準備したらいいのか、気をつけることや選書のポイントなどを具体的に紹介します。

会場・日時の設定

おはなし会は、幼稚園や保育園、図書館や児童館、学校、書店など、さまざまな場所で行われています。読み手と聞き手、そして本があれば、どこでもおはなし会を開催することができます。会場の設定などをちょっと工夫するだけで、子どもたちはおはなしの世界に入りやすくなります。

子どもたちに無理なく
声を届けられる会場で

広すぎる会場は、読み手の声が散りやすく、後ろの子もたちまで声が届かないことがあります。声が聞こえないのでは、子どもたちはおはなしを楽しみません。

BGMが流れる会場の場合は
音量を控えめに

おはなしに集中している子どもたちは、多少の雑音やBGMは気にしません。しかし、読み手の声以上に大きな音では、おはなしのじゃまをし、子どもたちは気が散ってしまいます。

子どもたちの視界に目立つものや
動くものが入らないように

読み手の後ろにポスターや動くものがあると、子どもたちはそちらに気をとられ、おはなしに集中できなくなります。ものがある場合は、布などで隠したり、ホワイトボードで仕切るといった工夫をしましょう。



子どもたちを落ちつかせるため
床に座らせる

子どもたちはイスに座るより床に座るほうが、気持ちが安定するので、落ちついておはなしを楽しむことができます。

読み手を中心に
子どもたちを扇形に座らせる

読み手を中心にして、子どもたちを扇形に座らせると、絵が見やすくなります。

開催日時の設定と告知

開催は子どもたちが集まりやすい日時を選び、ポスターやチラシなどで告知しましょう。不特定の子もたちが参加する図書館や児童館、書店などで開催する場合は、事前に参加の申し込みを受け付けるようにすると、参加者の年齢や人数が把握できるので、絵本の選定や会場の設定に役立ちます。

ボランティアをするために大切なこと

読みきかせが盛んになるにつれて、ボランティアが必要とされる場も多彩に広がっています。そのなかで、主催者とボランティアの間の認識のずれが思わぬトラブルにつながることもあります。

図書館・学校・書店など、活動の場によって、主催者が求めていることや参加者の構成は異なります。それぞれの場でのマナーやルールを守り、ボランティアとしての自覚や責任感を持って、楽しくおはなし会を進めていきましょう。

幼稚園・保育園・学校などの場合

- 「教える」のではなく、「子どもと一緒に楽しい時間を過ごす」という謙虚な気持ちでのぞむ
- 活動の中で知った情報(子どものこと、園や学校のこと)を口外しない、噂話しない
- 依頼された役割以外(蔵書や学級運営など)に口を出さない

書店の場合

- 販売現場であることを認識する(参加者はお客さま、本は商品)
- 本は必ず持参する(商品は使わない)。現在入手できる本を使う
- 店の批判や求められていないアドバイスはしない

病院・福祉施設・特別支援の場などの場合

- 聞き手の状態に配慮したプログラムを組む
- 医療施設では周囲の状況や利用者に配慮したふるまいをする

いずれの場合も、おはなし会をボランティアだけにまかされることのないよう、必ず主催者にも同席してもらいましょう。事故に備えることはもちろん、次回開催に向けての反省にもつながります。節度ある態度、言動を心がけ、担当の方と綿密に打ち合わせをして良好な関係を築いてください。

夏のおはなし会 プログラム例 0・1・2歳

テーマ：元気に夏を過ごしましょう 時間：30分

このプログラムのポイント
暑さに負けず、元気に遊びましょう！ 水遊びや冷たいソフトクリームもいいなあ。みんなで花火も夏ならでは。

① 『わらべうたえほん
とどけっこう よが あけた』

案／こばやしえみこ
絵／ましませつこ
990円(こぐま社)
「とどけっこう よが あけた〜」。わらべ歌の調子に合わせて読みきかせスタート！



② 『じゃあじゃあ びりびり』

作／まついのりこ
660円(偕成社)
オノマトベいっぱいの子ちゃん絵本。音から身近なものを認識できる楽しい1冊です。



③ 『こぐまちゃんのみずあそび』

作／わかやまけん
990円(こぐま社)
お水つながりで、水遊びの絵本を紹介します。夏のお遊びのワクワク感も伝わります。



④ 『ひまわり』

作／和歌山静子
1,100円(福音館書店)
夏の花ヒマワリが、どんどんどんどん大きくなっていきます。



⑤ 『おふとん かけたら』

作／かがくいひろし
935円(プロダクション)
表紙のソフトクリームが夏を感じさせます。ソフトクリームにお布団かけたら……。さあ、どうなるでしょうか。



⑥ 『語りかけ絵本 えだまめ』

文／絵／こがようこ
1,320円(大日本図書)
枝豆も夏が一番！ 話しかけながら進めていけるので、会場に一体感が生まれます。



⑦ 『びりびりはなび』

作／新井洋行
1,100円(講談社)
いろいろな花火が夜空に上がる仕掛け絵本。「たまや〜かきや〜」と一緒に掛け声を出しましょう。



⑧ 『ペンギんたいそう』

作／齋藤 慎
990円(福音館書店)
最後は、元気に夏を過ごすために、みんな一緒に「ペンギんたいそう」！ 絵本の終わりの「またあした」で、おしまい感を出しましょう。



(梅田悦世)

『でておいで』

作／スズキトモコ
1,650円(世界文化社)
「かわいい あかちゃん でておいで」の言葉とともに、右ページの折り返しを広げると、動物の赤ちゃんが顔を出す仕掛け絵本です。フクロウもリスも、みんな親子で一緒だね。

新刊



『にこにこ こここ』

文／川之上英子・健
絵／北村 人
1,210円(アリス館)
赤ちゃんににこにこ、ママもにこにこ。続いてネコが2匹でねこねこ、イヌはもこもこ、ヒツジはたくさんでもっこもこ。楽しい音の繰り返しが続きます。

『ぼん！』

作／村田エミコ
990円(福音館書店)
カメさんがじーっとしているかと思えば、次のページでは元気よく「ぼん！」と顔を出します。カンガルーもクジャクも、静の姿勢からパッと動のポーズに変身します。

新刊



新刊

サイン本
プレゼント
Webまたは
アンケート
用紙へ



『ももんちゃん ころん』

作／とよたかずひこ
990円(童心社)
「みて！ みて！」と、ももんちゃんがころんと転がりました。きんぎょさん、さほてんさん、おばけさんも、それぞれのやり方でころんと転がります。最後はみんなで一緒にころん。

ワンポイント
アドバイス

- 本を読むというよりも、会話の延長として、赤ちゃんひとりひとりを見ながら進めましょう。文章を繰り返したり、強弱をつけたりすることも大切です。
- 月齢と実体験を考え、生活に沿った内容、色彩がはっきりしたもの、文章にリズムがある絵本を選びましょう。
- わらべ歌や手袋人形をプログラムに入れるといいでしょう。とくに、はじまりに持ってくると効果的です。
- 保護者にも一緒に楽しんでもらい、家でも読みきかせをしなくなるようにアドバイスを添えます。

！ 注意点

- 会場設営時には安全面への配慮も重要です(段差やガラスなど)。
- 事故のないよう、おはなし会が始まる前に保護者に向けて、子どもの行動に気をつけてもらうよう、ひとこと伝えておきます。



新刊

『ぎゅぎゅっと くだもの』

作／ひらぎみつえ
1,100円(世界文化社)
ショートケーキの上にぶどうちゃんがちょこんと座っています。そこへ果物たちが次々「いーれーて」とやってきて、ケーキの上は満員です。あらら、ぶどうちゃんがぼてんと落ちてしまいました。



『おんぶーぶー』

作／矢野アケミ
1,320円(童心社)
青い車が「おんぶ おんぶ おんぶーぶー」と、バスにおんぶしてもらいました。ショベルカーは大型トラックに、小型飛行機は大型飛行機におんぶしてもらって、到着したのはどこでしょう？



『おふろで だあれ？』

作／新井洋行
1,320円(くもん出版)
「おててを ごしごし おなかも ごしごし」。石鹸の泡に包まれているのは誰かな？ シャワーを浴びているのは誰かな？ と、隠れている動物をあてっこしながら進みます。指を入れて遊べる仕掛け絵本です。



『だるまさん あっぷっぷ！』

文／長野ヒデ子
絵／つちだのぶこ
990円(あすなろ書房)
「だーるまさん、だーるまさん、にらめっこしましょ、わらうとまげよ、あっぷっぷ！」。だるまさんも、ゆうちゃんも、お母さんも笑いません。でも、赤ちゃんがころんころんしたら……。



『くだもの ころん』

作／彦坂有紀、もりといずみ
990円(講談社)
イチゴがひと粒、ころん。バナナは皮がべろん。洋ナシ、ブドウはほよ〜ん。そのほかにもリンゴ、モモなど、たくさんの果物が擬音とセットになって登場します。

赤ちゃん絵本
(0・1・2歳)

赤ちゃん向けの絵本は、一対一での対話を想定してつくられています。おはなし会は絵本との出会いの場。絵本は赤ちゃんと遊ぶ手段と考え、親子ともに、ゆったりとした気持ちで楽しんでもらうことがポイントです。

『ちいさな ちいさな だいぼうけん!』

作/黒岩まゆ
1,760円(大泉書店)



隠れ場所を探していたしょうちゃんは、とても小さなリトルから弟のスマルを探してほしいと頼まれました。リトルの呪文で小さくなったしょうちゃんは、見たこともない世界を大冒険します。

『まごわやさしい』

文/中川ひろたか
絵/こがめたく
1,760円(おむすび舎)



私たちの体は食べたものでできています。食べたものが体の中でどうやって消化吸収されていくのかを、わかりやすく解説します。心と体が喜ぶ魔法の言葉の歌「まごわやさしい」の歌詞と楽譜がついています。

『あの、ここ どうぞ。』

作/くすのきしげのり
絵/こがめたく
1,540円(偕成社)



図書館に行く電車の中で、女の子はおじいさんやケガをしている人に席を譲るため、声をかけようとしますが、うまくタイミングがつかめません。そのとき、おばあさんが電車に乗ってきました。女の子は席を譲ることができたでしょうか。

『くつした ど〜こだ?』

作/オガワナホ
1,320円(偕成社)



くつしたがつっぱだけ、どこかにいってしまいました。最初に探しに行ったのは、しましまのくつした。隠れていたもう片っぱのくつしたは見つかったかな? 絵の中に隠れているくつしたを探してみましょう。

『ミラーさんちのころころ ころがるおひっこし ほんとうにあった話』

文/ティヴ・エガーズ
絵/ジュリア・サルダ
訳/青山南
2,420円(化学同人)



1870年代、アメリカ西部アイダホに、金や銀を探して大勢の山師たちが集まりました。ペルビューという町に今もある、「ミラーさんのミニー・ムーアの家」のおはなしです。

『ななくさのえほん はる あき』

文/谷本雄治
絵/大野八生
1,650円(岩崎書店)



おかゆに入れて食べる春の七草、花を見て楽しむ秋の七草。どんな植物が知っていますか? それぞれの名前の由来、特徴、食べ方、遊び方などが紹介されています。前後両方から開いて2冊分楽しむことができます。

『ブロンテきょうだいの ちいさな手づくり絵本』

作/サラ・オレアリー
絵/プライオニー・メイ・スミス
訳/ひびのさほ
1,760円(岩崎書店)



「嵐が丘」「ジェーン・エア」など英文学の世界で名高いブロンテきょうだいは、荒れ野のはずれの牧師館で育ちました。楽しみは本を読むこと、小さな本をつくることでした。

『からくさようちえん いぬはりこくんの たからさがし』

作/かのうかりん
1,650円(NHK出版)



宝探しのため外に出たいぬはりこくん。友だちが見つけたものは宝物だとは思えません。いぬはりこくんが見つけた木の枝は、みんなからはただの枝だと笑われます。そこに、枝の持ち主が姿を現しました。

『はじめてみなきや わからない!』

作/アンドレア・ベイティー
絵/ティヴィッド・ロバーツ
訳/三辺律子
1,980円(絵本塾出版)



ライラは「もしも?」と考えたら不安になってしまう女の子でした。新しい学校で出会ったカーン先生は、そんなライラを黒板係にして友だちを増やすきっかけをつくってくれました。不安を乗り越えたら夢はかなうのです。

『せんにんの せんにな』

作/大串ゆうじ
1,650円(大泉書店)



ダジャレが大好きな仙人が1000人いました。仙人たちは絵と言葉を組み合わせました。絵ダジャレ問題を毎日楽しんでいます。仙人から次々と出される絵ダジャレ問題を解くことができますよ。

『もういちどみてごらん かなしみのうみ』

作/アンナ・ユティカ、キアラ・ヴィニョッキ、シルヴィア・ポランド
訳/山下愛純
1,650円(アチエロ)



悲しい気持ちになった海の底の小さな魚は、気分を変えようと出かけたが、出会う魚たちもみんな悲しい様子です。でも、カメに会って本をひっくり返してみると……。

『あさといえば…』

『よるといえば…』
作/新井洋行
各1,430円(アルファポリス)



朝といえば朝日! 丸い太陽が昇ったら、大きな声であいさつしましょう。朝ごはんはオムレツです。夜といえは歯みがき、お風呂に入ったらぐっすり眠りましょう。連想が楽しい生活の絵本です。

『いたいの いたいの とんでいけ!』

作/なるかわしんご
1,980円(イマジネーション・プラス)



「いたいの いたいの とんでいけ!」のおまじない。どこに飛んでいくのか疑問に思ったぼくは、パパに聞いてみます。植物やおもちゃ、昆虫も痛みを感じるのか、そんな気持ちに引き合いながら、ぼくもおまじないを言います。

『ぎんいろせいじんのやくそく』

作/藤野可織
絵/ゴトーヒナコ
1,870円(岩崎書店)



すーちゃんは「100年たつと物に命が宿る」と聞き、100年後を見に行く役目をプラスチック製のぎんいろせいじんに託し、クッキー缶に入れてふたを閉めました。100年後、ぎんいろせいじんが目にした世界とは。

『とらのセーター』

作/田中映理
1,650円(岩崎書店)



いなくなったネコの代わりに「ねこちゃんのふりをしてくれない?」と頼まれた、トラ。おばあちゃんと一緒に寝たり、セーターを編むお手伝いをしたりしていました。そこへネコが帰ってきました。

もう 読んだ? 新刊 100!!

2025年12月~26年2月に発売された新刊絵本の中から、読みきかせにもおすすめの100冊を選びました。子どもたちとすてきな時間を過ごしてください。

※出版社五十音順 ※㊦は右開きの本。㊧は縦開きの本。
👶マークは乳幼児から、🎒は中・高校生も楽しめる本です。

定期購読者限定プレゼント

新刊絵本プレゼントの詳細は、このページの下欄をご覧ください。

『雲がおしえてくれること』

文/レイチェル・カーソン
絵/ニッキ・マクルーア
訳/千葉茂樹
監修/荒木健太郎
2,090円(あすなる書房)



『沈黙の春』で環境保護運動の先駆けとなったレイチェル・カーソンが、70年前テレビ番組に参加したときの台本が、絵本として蘇りました。雲は、かけがえのない空に描かれた風の言葉です。

『ゴリラのはなくそ』

文/たなかなおと
絵/ほりかわりまこ
1,650円(あすなる書房)



ゴリラとの約束です。何を聞かれても「ゴリラのはなくそ」と答えてください。朝ごはんは何を食べた? 昨日は何の夢を見た? 力を入れると出ちゃうのは? 愉快的参加型絵本で笑っちゃいましょう!

『どっちにすすむ?① おうじさまを さがしにいこう!』

文/シルヴィ・ミスラン
絵/アマンティエヌ・ピウ
訳/小川浩一
2,530円(アチエロ)



小さなプリンセス、ローズとジョージーは、すてきな王子さまを探しに行くことにしました。お城に行く道はどれでしょう? 進みたいイラストを選ぶと、開いたページからおはなしが続きます。

※JPIC直販の定期購読の方に、抽選で新刊絵本100冊から1冊をプレゼントします。巻末のアンケートハガキまたはホームページのアンケートフォームから応募してください。

絵本



新刊

『とうだいの光』

作/山下ますみ 絵/ささきみお
1,760円(新日本出版社)

戦争中のある日、見慣れない飛行機が灯台の私にぶつかり、私は破壊されてしまいました。でも、日が暮れた海で漂う船を見つけ、助けなくては！と力をふりしほります。青森県の下北半島に立つ尻屋崎灯台のおはなし。



『ダニーさんの ちゃぶだい』

企画/ダニー・ネフセタイ
作/なるかわしんご
1,980円(イマジネーション・プラス)

イスラエルに住んでいたダニーさんの家族はみんな兵隊で、ダニーさんも徴兵され3年間の兵役につきました。その後、日本に来たダニーさんは敵とされていた国の人に出会い、大切なことに気づきます。



新刊

『シロくんと パレスチナの猫』

文・写真/高橋美香
1,980円(かもがわ出版)

シロくんの飼い主は、よくパレスチナに行きます。その難民キャンプには家族同然の人たちがいるのですが、イスラエルによる攻撃で何人も命を落としています。そこにはネコたちもたくさんいて、戦渦を生きています。



『赤い日 じいちゃんの見た戦争』

作/長田真作
2,750円(汐文社)

ぼくがまだ小さかったころ、おじいちゃんはいつも「行って帰ってこいよー」と送りだしてくれました。戦時中、若かったおじいちゃんのもとにも赤紙が届き、軍事工場のある呉に送られました。そして、激しい空襲で大切な友を失ってしまったのです。



『一郎くんの写真 日章旗の持ち主をさがして』

文/木原育子
絵/沢野ひとし
1,430円(福音館書店)

新聞記者の私のもとに、日章旗の持ち主を探してほしいという連絡がありました。アメリカで見つけたその旗には「一郎君」と書かれていました。旗に寄せ書きをした人々を訪ねながら、一郎君を探します。

『ありんこと カンナの花』

切り絵/毛利まさみち
文/ナムーラミチヨ
1,760円(地平社)

ある夏の朝、アリたちがせっせと働いていたとき、ピカ！とものすごい光がさして、ドン！という大きな音がしました。一瞬で焼きつくされてしまった地面の下で、アリたちは元気のない根っこに水をあげ続けます。



新刊

『もしも わたしが』

文/チャン・ドクヒョン
絵/ユン・ミスク
訳/かみやにじ
1,980円(童心社)

王さまは、言うとおりにすればみな幸せになると言います。よその国から避難民が来ても関係ないと追い払い、障がいのある人を自分たちとは違うとお城の外に追いやります。だまって見ていた私は、ある日つかまってしまいました。



新刊

『ともに生きるための「世界ルール」 えほん人種差別撤廃条約』

文/阿久澤麻理子、小森 恵
監修/反差別国際運動(IMADR)
絵/ナイダ・マツエンガ
2,200円(解放出版社)

1965年、国連で決めた「人種差別撤廃条約」は、人はみな差別されることなく、法律によって守られる権利があると定めています。すべての人を人種差別から守る、この世界ルールを子どもにもわかりやすいように解説しています。



新刊

『ガザを知っていますか？ ガザの真実を伝えようとした記者 モハマッド・マンスール』

文/桑山紀彦
写真/モハマッド・マンスール、桑山紀彦
1,980円(イマジネーション・プラス)

「忘れられないあの日」を絵にするというワークショップで、色のない絵を描いたモハマッド。日本人のドクターKは毎年ガザを訪れて交流を深め、やがてモハマッドはガザで起きていることを世界に伝えるジャーナリストになりました。



新刊

『ガージュー先生 対馬丸事件を生きぬいた少女の物語』

作/たじまゆきひこ
2,200円(童心社)

1944年、いよいよアメリカ軍が沖縄本土へ攻めてくるといわれ、子どもたちと高齢者は内地へ疎開することになりました。ところが、疎開船の対馬丸は出港して間もなく、攻撃され沈没してしまいます。多くの子どもたちが犠牲になったなか、生存者がいました。

『わたしたちのふるさと パレスチナ』

文/ハンナ・ムシャツベク
絵/リム・マドゥ
訳/野坂悦子
監修/鈴木啓之
2,200円(ほるぷ出版)



アメリカで生まれたパパは、子どものころ、パレスチナに住むおじいちゃんの家泊まりに行っていました。その話を何度も聞かしてくれます。でも、ある年を最後に、パレスチナに行くことができなくなったのです。

祝 国際アンデルセン賞受賞

『ONE DAY ホロコーストと闘いつづけた父と息子の実話』

文/マイケル・ローゼン
絵/ベンジャミン・フィリップス
訳/横山和江
2,200円(鈴木出版)



パリに住んでいたユダヤ人のユージンと父は、ナチスに対抗する運動をしていました。でも、警察につかまって、収容所に送られてしまいます。その後も、トンネルを掘ったり、輸送中の列車から飛び降りたりして、一日一日を切り抜けてきました。

『シリアの秘密の図書館』

作/ワフアー・タルノフスカ
絵/ヴァリ・ミンツイ
訳/原田 勝
1,760円(くもん出版)

ヌールに住む町は美しかったのに、内戦でがれきだらけになってしまいました。地下シェルターで避難生活をしながら、ヌールたちは、本を集めて図書館をつくることを計画します。



『変わってしまった ぼくの町、ぼくの学校 ウクライナの少年・ダニールが見た戦争』

絵・文/ダニール 写真・訳/ERIKO
1,760円(汐文社)

ロシアがウクライナに侵攻してきてから、ダニールくんの生活はすっかり変わりました。学校がオンライン授業になり、登校しても警報が鳴れば地下室に移動します。その様子をダニールくんが絵と文でつづっています。



読みきかせ・おはなし会 用語事典

「おはなし会」の打ち合わせで、何げなく飛び交っているあの言葉つてどんな意味？
今さら聞けない「おはなし会」用語・前編を五十音順に解説します。
肩の力を抜いてお楽しみください。

イラスト／ヨシタケシンスケ



あ

あ 赤ちゃんえほん「赤ちゃん絵本」
0・1・2歳の乳幼児と一緒に楽しみたい絵本です。赤ちゃんが絵本に興味を持ってじっと見たり、手を出したりするようにするのは、生後10カ月ごろからといわれています。でも、何ごとにも個人差があります。赤ちゃん絵本の特徴は、小さい子どもが手にとりやすいサイズで、パッと目を引くはつきりした色使いのものが多くあります。また、赤ちゃん絵本は、赤ちゃんだけのものではなく、赤ちゃんから高齢者まで、すべての年代の人が楽しめる絵本でもあります。

あさのどくしよ「朝の読書」

小・中・高校生に、本を読む習慣を身につけてもらおうと、始業時間前などに読書の時間を設ける運動。
①みんなでやる、②毎日やる、③好きな本でよい、④ただ読むだけの4原則のもとに行われています。1988年に、船橋学園女子高校（現・東葉高校）の2人の教諭が提唱したことをきっかけに、全国に広がりました。朝の読書は、本を読む習慣が身につくだけでなく、学校生活に落ち着きをもたらすともいわれています。2012年には2万7000校で実施されていたものの、25年の調査では、2万5522校（全国の学校の76%）と、近年減少傾向にあります。

あすとりつどりんどぐれーん
きねんぶんがくしよ

「アストリッド・リンドグレン 記念文学賞」

「長くつ下のピッピ」(邦訳、岩波書店ほか)や「やかまし村の子どもたち」(邦訳、岩波書店)などの作品で知られるスウェーデンの児童文学作家、アストリッド・リンドグレンの功績をたたえて、2002年にスウェーデン政府によって創設された文学賞です。世界じゅうの児童文学作家、絵本作家、イラストレーター、詩人などから、毎年1〜2人の受賞者が選ばれます。第1回の受賞者は、絵本「かいじゅうたちのいるところ」(邦訳、富山房)のモーリス・センダック。日本からは2005年に絵本作家・荒井良二さんが受賞しました。

あんでるせん「アンデルセン」

デンマークの童話作家、詩人、ハンス・クリスチャン・アンデルセン(1805〜1875年)。代表作に「親指姫」「人魚姫」「裸の王様」



移動させたり、体全体を使ってダイナミックに演じたりできるのが特徴です。



お おおがたえほん「大型絵本」
一度に大勢の子どもたちに読みかせるために、作者の許可を得て拡大制作された絵本。縦横ともに30cm以上あるものを、大型絵本と呼ぶことが多いようです。大型絵本は、その大ききゆえの迫力で子どもたちに大人気です。読むときの注意点は特集P11へ。

おくづけ「奥付」

書籍や雑誌の末尾などに、題名、著者名や編者名、発行者名、印刷や発行の年月日、版数や刷数、著作権の表示など、出版に関する必要事項が記載された部分。欧米の本では、タイトルの次のページに記載されている場合もあります。発行年月日を見れば、その本が新しいか古いかわかります。版数や刷数を見れば、その本が売れているかどうかがおおよそわかります。

「みにくいアヒルの子」などがあります。アンデルセンの作品は、グリム童話のような昔ばなしではなく、創作童話が多いことが特徴です。2014年に大ヒットしたディズニー映画「アナと雪の女王」も、アンデルセン童話がもとになっています。(本誌14号で特集)

い

い いそづぶものがたり「イソップ物語」
紀元前6世紀の小アジアで、アイソップス(イソップ)という奴隷が寓話をつくったのがもととされていますが、アイソップスが実在したかどうかは不明です。イソップ物語は、古代メソポタミアや小アジアの民話に、後世の寓話が加わって今日の形になったと考えられています。日本には1593年に、「イソポのハブラス」として、イエズス会の宣教師によって伝えられました。代表作は、「アリとキリギリス」「ウサギとカメ」「北風と太陽」など。(本誌54号で特集)

いどうとしよかん「移動図書館」

自動車や船に、書籍などの資料と職員をのせて移動して、図書館を利用しにくい地域の人々に書籍などを届ける仕組み。世界各地に、その土地や風土に合った移動図書館があります。日本では第2次世界大戦後に全国的に普及しましたが、市町村立図書館が増えるにしたがって減っていき、現在に至りま

す。東日本大震災の被災地では、「子どもたちへあしたの本」プロジェクト」の移動図書館車が活躍しました。

いびー「IBBY」

国際児童図書評議会(International Board on Books for Young People)の略称。子どもと子どもの本に関わるすべての人をつなぐ世界的ネットワークとして、1953年にスイスで設立されました。活動の目的は、子どもの本を通して国際理解を進めること、世界じゅうの子どもたちが文学的、美術的に質の高い本に巡り合えるようにすること、などです。皇后美智子さま(現・上皇后)が、2002年のIBBY創立50周年記念大会に名誉総裁として招かれ、おこぼを述べられました。大きな話題になりました。

いわなみのこどものほん

「岩波の子どもの本」

岩波書店が、1953年に創刊した絵本のシリーズ。初期の刊行書目は、岩波書店の嘱託社員だった石井桃子と、海外絵本を多数蒐集していた光吉夏弥が中心となって選定されました。「ちいさいおうち」(文・絵／バージニア・リー・パートン)や「ひとまねごころ」(文・絵／H・A・レイ)などは、ロングセラーとして現在も子どもたちに親しまれています。戦後10年もたたない、日本がまだ貧しかった時代に、高

え

えぶろんしあたー®

「エプロンシアター®」

胸まで覆われるエプロンを舞台上に見立てて、ポケットから次々と人形を取り出して演じる、人形劇。中谷真弓さん(幼児教育研究家)が考案しました。人形をエプロンのポケットから出したり、エプロンにくっつけたり、ポケットに戻したりしながら、物語を進めていきます。演じ手と舞台が一体になっており、舞台を